

砂土に 茎を植える人びと

村尾るみこ

はじめに

アフリカでのキャッサバ栽培は、その多くが食用を目的としている。これは主に工業的な用途を目的として栽培されるアジアと大きく異なる特徴である。新大陸からアフリカへと伝播したこの作物は、地域間の交易をとおして広まり、早ばつに強い作物として、また休閑期間が短縮され地力が低下した畑での救荒作物として各地で栽培されるようになった(Johns[1959])。東アフリカでは主作物を支える補完的な作物として利用される傾向にあるが、西アフリカ、中部アフリカにおいては市場向けの作物としても利用されている。南部アフリカでは、ザンビア、アンゴラ、モザンビーク、マラウイを中心に栽培されており、各世帯で自家消費される重要な主作物の一つとなっている。キャッサバ栽培に関する先行研究では、単位面積当たりの収量が高いことや毒抜き、調理法といった加工法などの経済的、文化的側面に注目したものが圧倒的に多くみられる。しかしその一方で、ア

フリカ起源の雑穀などに比べてその導入の歴史が浅いためか、キャッサバ栽培に関する社会的側面に言及するものは少ない。

本稿は、キャッサバ栽培の生態的、社会的側面を総合的に検討する試みとして、ザンビア西部のアンゴラから移住してきた人びと(以下、移住民)の例に注目する。以下では、特に移住民がザンビア西部へと移住しキャッサバを導入してきた歴史的経緯や、それぞれの品種の栽培特性と独得の栽培技術との関連性、さらには親族集団をとおした土地の管理体制に注目して考察していく。

1. ザンビア西部州への人と キャッサバの移動

ザンビアの西部州は、州都から首都までの距離が約600キロメートルという遠隔地にあり、国内でも低開発の「辺境」にある地域ともいえる。人口密度は6人/km²と国内で2番目に低く、また州内の人口の9割が、州都や県庁から離れて散在

する村に住んでいる (Environmental Council of Zambia [2001])。

西部州の中央はザンベジ川が縦貫し、その両岸には広大な氾濫原が形成されていて草原となっている。氾濫原は、かつてロジの人びとが強大なロジ王国を建国した場所として有名で、ロジの生業の場である。一方、氾濫原周辺はカラハリ・サンドという砂土が深く堆積する台地が広がっている (White [1983])。この台地に発達する植生は、落葉性でマメ科ジャケツイバラ亜科の樹木が優占するカラハリ・ウッドランドである。移住民はこのウッドランドに造成した焼畑でキャッサバを栽培するが、そこは彼らが定住し耕作を開始する以前、未開墾の土地であった。

本稿で移住民と呼ぶのは、ンブンダ、ルチャジ、ルバレ、チョクエといった人びとである。彼らは現在のコンゴ民主共和国からアンゴラ東部にかけて居住していたバンツ系農耕民で、耕地に適した土地を求めて移動を繰り返していた。19世紀後半には、それらの人びとの一部が現在の西部州に当たるロジ王国領土へと移住を開始した。やがて20世紀に入ると、アンゴラではポルトガル植民地政府に対する独立紛争が起こり、1975年に独立した後も内紛が続いた。この混乱によって、従来からの移動に加えてより多くの人びとがザンビア西部へ流入することとなった (Hansen [1979])。

現在西部州では、こうした移住の時期や理由の異なる移住民が一つの村に混住している。そして彼らは多くの場合、先住のロジの人びとから肥沃な氾濫原での耕作を拒まれている。その背景には、ザンビアにおける伝統的な土地保有制度や伝統的支配者の支配の解体が周辺国に比べて独立後も押し進められてこなかった (児玉谷 [1999]) ために、西部州では現在もロジ王国の階層的な統治機構が土地の利用や管理に関与していることが指摘でき

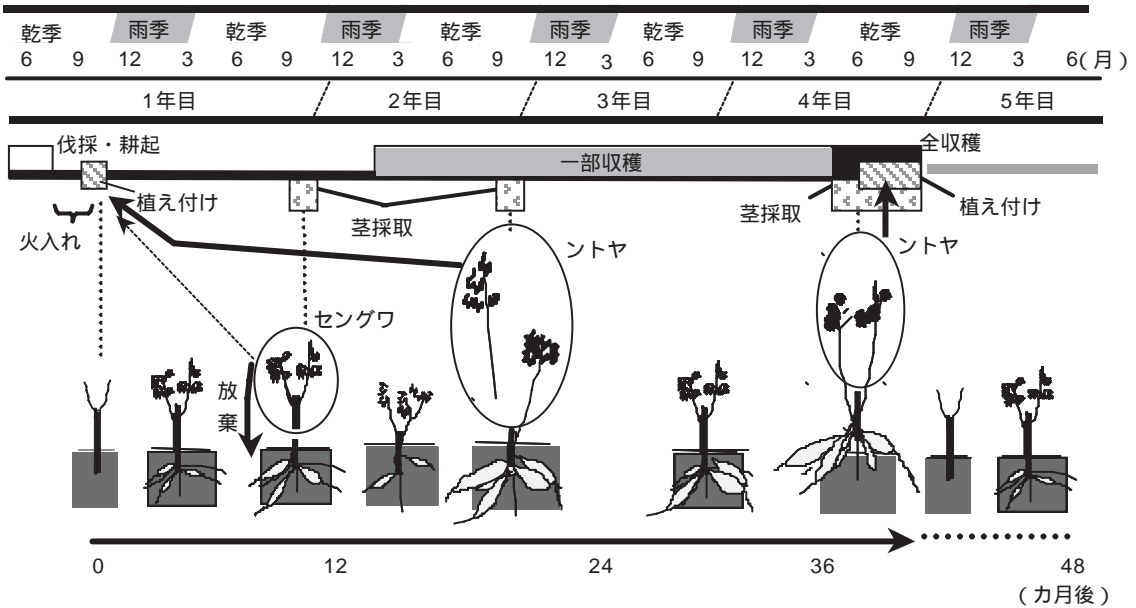
る。氾濫原は王の権力を示す象徴的な場所でもあり、植民地期は植民地政府によって土地に関する特権を認められてきたが、それは独立を機にザンビア政府によって廃止された。しかしながら依然王国の権威は住民に強く意識されており、移住民の土地利用にかかる制約にもそれが反映されている。こうしたことを背景に、未開墾であったカラハリ・ウッドランドに流入した移住民によってキャッサバ栽培が急速に広がっていった。そして今日、キャッサバは移住民の主食作物としても、また現金収入源としても1年をとおして利用される重要な作物となっているのである。

2. キャッサバの栽培技術

移住民はカラハリ・ウッドランドに焼畑を造成すると、そこにキャッサバを植え付け、4年1サイクルで12年から16年近く連作するのが一般的である (図1)。人びとは、乾季前半に畑の造成を開始する。まず樹木の伐採、耕起をしてから幹や枝を放置して乾燥させ、乾季后半に火入れする。火入れ後は、すぐにキャッサバの植え付けを始め、植え付け後15カ月後には肥大した塊根だけを掘り取る一部収穫が始まる。さらに、植え付けから4年が過ぎるころには、株ごと掘り起こして塊根をすべて収穫する。このとき得られる種茎は、たいてい収穫した場所付近に、そのまま植え付けていく。

ここで注目すべきは、カラハリ・ウッドランドという乾燥した砂土に発達した環境ならではのキャッサバ栽培技術である。他の地域では、収穫時に引き抜いた株から取れる茎を短く切って、数本できた20~40センチメートル程度の種茎を植え付けるのが一般的である。しかしカラハリ・ウッドランドでは、植え付けから1年後に、生育中のキャッサバの地際から茎を切り取ってそのうちの

図1 キャッサバに関わる農事暦と生育の様子



(出所) 筆者作成。

多くを放棄する。さらにその1年後に再生した1メートルほどの茎を切り取って、長いまま別の畑に植え付けていく。この方法では、生育中の株から地上部の大半を切り取ってしまうので塊根の生育は阻害され、収量に悪影響を及ぼすことが必至となる。しかし人びとは、容赦なく採取していく。ここで採取された長い茎を種茎とするのは、茎の内部にある、乾季の生育に必要な水分を貯蔵する組織を多く含んでいなければならないためである。しかしこの一方で長い種茎を用いると、キャッサバ1株から取れる種茎が少なくなる。塊根をすべて収穫したときに得られる茎だけでは、収穫後の畑に加え、新たに開墾した畑に植える種茎の本数は不足してしまう。したがって生育途中の株からも種茎を採取する必要が生じるのである。

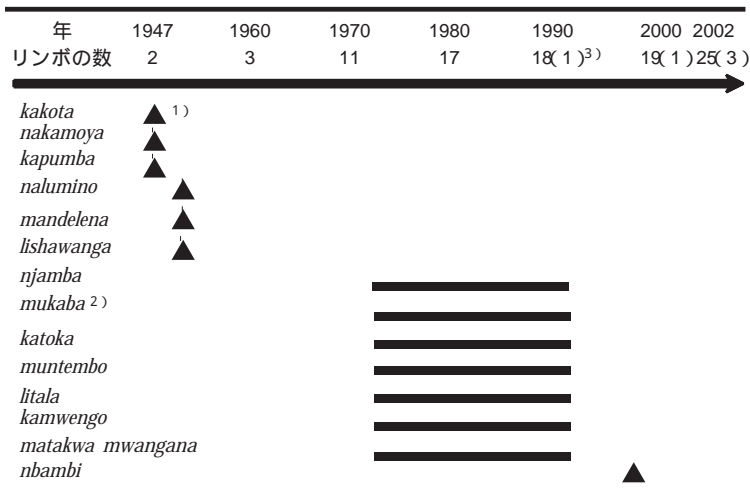
さらに生育中のキャッサバからの種茎の採取は、茎の質にも関係している。再生直後の若い茎は、その後1年ほど経った茎より植え付け後の塊

根や地上部の生育が旺盛である。移住民もそれを理由に若い種茎を良質のものと認識して「ントヤ」と呼んでいる。その若い茎の再生をねらって、人びとは生育途中の株から「セングワ」と呼ばれる茎を切り取って、大半を放棄してしまうのである。

3. 品種の導入と選択

村では14のキャッサバの品種が栽培されていて、そのうち苦味種は5品種、甘味種は9品種ある(図2)。村が設立された1947年にやってきた人びとは、これらのなかの三つの甘味種 *kakota*, *nakamoya*, *kapumba* を栽培していた。しかしその2年後に隣村に移住してきた人びとによって、苦味種の *nalumino* と呼ばれるキャッサバが導入された。これを植えてみたところ、甘味種よりも乾燥によく耐え、また野生動物による食害にもあいにくかったため、急速に栽培が広まったという。

図2 調査した村で栽培される14品種のキャッサバとその導入時期



(注) 1) ▲は導入された時期を示す。
 2) 明確な導入の時期がわからない7品種については推定される時期に■を付した。
 3) カッコ内の数字は既存のリンボから新たに分裂して成立したリンボの数。
 (出所) 筆者作成。

その後村へ移住してきた人びとによってさらに多くの品種が導入された。しかし現在みられる14品種のうち、焼畑で栽培される9割以上は *nalumino* である。村人は「*nalumino* 以上に栽培に適するものはない」と語るが、このように *nalumino* が好まれる理由には栽培期間と作物生理学的な特徴が関係していると思われる。

キャッサバの品種ごとの植え付けから収穫終了までの期間を比較してみると、甘味種は1年から2年であるのに対し、*nalumino* は6年と長い。*nalumino* は塊根の繊維化がすすむまでの期間が長く、栽培期間も他の品種に比べて長い。村人は *nalumino* だと長い期間植え付けたまま塊根を収穫しつづけられるので、甘味種に比べ植え付けや種茎の切除など管理の手間が省けてよいと説明する。また *nalumino* は、他の品種に比べて耐乾性に優れるだけでなく、耐病性にも優れ、さらに高

収量性である。彼らは移住してきた人びとが持ち寄る新たな品種を導入し栽培する過程で、「*nalumino* 以上のものはない」ことを再確認しつつその栽培を増やし、ウッドランドで広く栽培するようになった。先にみた4年の栽培を1サイクルとする栽培法は、この収穫までの期間が長い苦味種の特性にも支えられているのである。

4. 土地の管理体制

移住民は、親族の共住集団をさすリンボを単位としてウッドランドを管理し、キャッサバを耕作している。リンボには長がいて、この長を介してウッドランドを入手し畑を造成する。調査を実施した村では2002年4月現在で25のリンボが存在しており、村人はこの25のリンボのうち必ずいずれかのリンボに属していた。各リンボの長は、村長が管理するウッドランドの一部の利用を村長に頼み、もらいうけたウッドランドをリンボの成員である個人に分配する。リンボの成員は自分が新たに開墾するウッドランドがなくなったり、子供が耕作を開始するのに新たなウッドランドが必要となると、リンボの長にもらいうける。転居や病死によって畑の耕作者がいなくなった場合には、残された畑や二次林は1度リンボの長に返さ

れ、その子供や妻、耕作を始めたばかりで畑面積の小さい若者などを中心に、リンボ内で再分配される。

移住が始まった当初、移住民は土地を使う見返りとして王に貢納を納めるなど、王国の統治体制に組み込まれてきた。しかしザンビア独立後は政府が制定した法により、王の特権の廃止などが定められ、王への貢納は廃止された。またザンビアの土地法により、西部州を含むすべての土地を公的にはザンビア政府の管理下におくことが定められている。しかしいまだに西部州では王の土地に対する権利が強く意識されていて、移住民の氾濫原の利用は随時王国の地方役人により阻止される。一方で、ウッドランドの利用に限っては移住民に管理を一任されているのが現状である。

5. 「新たな土地資源」を創る

移住民にとってウッドランドの土地の管理は、地中に貯蔵される生計の糧であるキャッサバを管理することでもある。この乾燥したウッドランドでキャッサバを耕作し続けるには、生育途中の *nalumino* の茎を切り取るという栽培技術が必須のものとなる。*nalumino* の栽培は、移住民の試行錯誤と取捨選択の結果成立してきたものであろうが、その他の品種もいまだにわずかながら栽培され続けている。それは紛争などのさまざまな移住の経歴をもつ移住民が混住する場において、今後起こり得る社会的、生態的条件の変化に対処し得る可能性を残しておくことが意図されているのかも知れない。

ザンビア西部における土地の管理体制のなかで、実際のウッドランドの利用では移住民自身がその管理を担ってきた。アンゴラの政情悪化により流入人口が増加したが、移住民は親族集団をと

おして速やかに土地へアクセスして生計の立て直しを図ってきた。今後もこの地域で政治的、社会的に弱い立場にある移住民が土地を確保していくには、親族集団やそれを統括する村長をとおして土地を入手し、管理する体制がますます重要となるであろう。

ウッドランドを中心とした移住民の営みとは対称的に、ロジの人びとは氾濫原を生活空間としてきた(岡本[2002])。ロジの人びとにとってウッドランドとは、植民地政府によってインフラが整備されるまで、王領地でありながらも生活との結びつきが弱い外縁に広がる土地であった。移住民は、ザンビア独立後土地にかかる権利が複雑化するなかで、耕作を許されたこの外縁の砂土の堆積地にキャッサバの茎を植え続ける営みをとおして、未開のウッドランドに「新たな土地資源」を創造し、自らが生きる場を開き続けているのである。

【参考文献】

- 岡本雅博 [2002] 「ザンベジ川氾濫原におけるロジ社会の生業構造」(『アジア・アフリカ地域研究』第2号) pp.193-242。
- 児玉谷史朗 [1999] 「ザンビアの慣習法地域における土地制度と土地問題 中央州のある村の事例を中心に」(池野旬編『アフリカ農村像の再検討』アジア経済研究所) pp.117-170。
- Environmental Council of Zambia [2001] *State of Environment in Zambia 2000*, Lusaka: Environmental Council of Zambia.
- Hansen, Art [1979] "Once the Running Stops: Assimilation of Angolan Refugees into Zambian Border Villages," *Disasters*, 3(4) pp.369-374.
- Jones, William O. [1959] *Manioc in Africa*, Stanford: Stanford University Press.
- White, Frank [1983] *The Vegetation of Africa*, Paris: UNESCO.

(むらお・るみこ / 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)